羽村市史編さんだより

令和2年10月

第23号

伸びゆくはむら

特集　関東大震災と西多摩村

今号の内容

部会の手帖
News
資料紹介
市史編さんの足あと
コラム「ちっとんべぇ」

特集 関東大震災と西多摩村

９月１日は防災の日です。この防災の日は、1923（大正 12）年の関東大震災が発生した日にちなんで 1960（昭和 35）年に制定されました。今回の特集では、関東大震災が発生した直後の西多摩村の様子を紹介します。

◆東京都心部の被害

1923 年９月１日、神奈川県西部を震源とする推定マグニチュード 7.9 の地震が首都圏を中心とした関東地方を襲いました。震源に近い現在の東京都心部、千葉県館山市、神奈川県横浜市などでは現在の基準で震度６から７の非常に強い揺れを観測し、遠くは北海道や中国・四国地方でも揺れが観測されたほどでした。死者数は 10 万人を超え、犠牲者の規模では日本史上最大級といわれた未曾有の大災害です。

特に人口が集中し近代化が進んだ東京都心部では火災による被害が大きく、市民の半数以上が家を失い大変な混乱となりました（**史料１**）。

▲史料1：『歴史寫眞　関東大震大火記念號　第壱巻』（1923 年 10 月　歴史寫眞會発行、雨倉寿男家所蔵）より、地震直後の日本橋と火災により全焼した三越呉服店

◆西多摩村救護班

西多摩郡西多摩村（現在の羽村市域）でも強い揺れが確認されましたが、幸いにも被害は軽少で、人畜の被害は無かったといいます。しかし都心部の被害の大きさが詳細に報じられるようになってくると、西多摩村の人びとはこれを黙って見ていることはできずと立ち上がりました。西多摩村青年会・在郷（ざいごう）軍人会・処女会の三会合同で村内から支援物資を募り（**表**）、災害から４日後には物資を積んだ 18 台の荷馬車と共に青年会・軍人会の会員 60 名が救護班を結成して西多摩村を出発し、新宿へと応援に駆けつけました。

救護班は新宿駅に着くと、西多摩村郷友会（東京都心部に在住する西多摩村出身者による会）の応援も得て、被災者への炊き出しと配給活動を行いました。また、西多摩郡役所からの要請に応じて、９月 15 日からも 13 名の会員が配給活動の労力奉仕に赴きました。これらの活動に対し、後日、郡役所や帝国在郷軍人会などから感謝状が贈られています。震災当時、このように周辺地域の住民によるボランティア的活動が大きな役割を果たしました。

表：村内から寄贈された支援物資の一覧
『青年會報　第 20 号』（1924 年6月　西多摩青年會発行、郷土博物館所蔵）に加筆し作成。

分類	品名	数量
食品	白米	3石4斗（＝8.5俵、約510kg）
	押麦及引割麦 ※1	29石（＝72.5俵）
	沢庵（たくあん）	大樽36本（約3,500本）
	味噌	小樽15本
	醤油	小樽
	梅干	小樽9本（約13,000粒）
	ラッキョウ	小樽10本
	茄子	1,700個
	葱	10把
	菜漬	大樽1本
	西瓜（すいか）	1個
	梨	50個
	烏賊（いか）	85枚
	南瓜（かぼちゃ）	35個
	唐蜀黍（とうもろこし）	20本
	茄子塩押	小樽7本
	素麺（そうめん）	7箱
	馬鈴薯（ばれいしょ）	120貫（＝約450kg）
	サイダー	2本
	鮭	2本
	砂糖	5斤（＝約3kg）
	煎り豆	2升
	製粉	5袋
	甘藷（かんしょ）※2	3俵
	缶詰	12個
食器類	茶碗	240個
	瀬戸物類	124個
	鍋	2個
	急須	12個
	箸	4,190人前

分類	品名	数量
日用品	ロウソク	1,067本
	マッチ	147包（10箱入）
	付木　※3	大7把
	木炭	1俵
	手拭	1,000本
	半紙	621帖
	風呂敷	7枚
	晒木綿（さらしもめん）	14反
	石鹸	7個
	薬	166袋
	針	80本
	糸	20綛
	傘類	43本
	茣蓙（ござ）	4枚
	新聞紙	若干
着物・履物	着物・衣類	519点
	反物	5反
	帯	3本
	前掛	9枚
	下駄	52足
	草履	49足
	足袋	27足

※1　押麦は蒸した大麦を平たく潰して乾かしたもの、引割麦は臼で荒く挽いた大麦のこと　※2　さつまいものこと　※3　火を移す際に用いる木片

◆西多摩村での被害

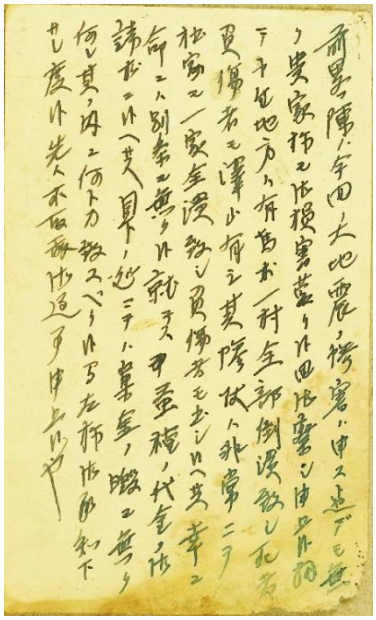
震災による西多摩村の被害は、家屋や死傷者という面では大きくなかったものの、地形や経済には少なからず影響を与えました。

宮の下運動公園の対岸に位置する丸山は、その名の通り丸い形の山であったのが、地震による土砂崩れで前面が大きく削れて形を変えてしまいました（**写真、史料２**）。

川崎地区で蚕種業（蚕の卵を生産・販売すること）を営んでいた養蚕農家の雨倉家には、有馬村本郷（現在の神奈川県海老名市）の養蚕農家から、蚕種代金支払いの遅延を知らせるはがきが残っています（**史料３**）。

有馬村は「一村全部倒潰致シ死者負傷者モ沢山有シ其惨状ハ非常ニテ」と被害が大きく、差出人の養蚕農家も「一家全潰致シ負傷者モ出シ」現在は代金を支払える状況ではないため、「何レ其ノ内ニ何トカ致ス」旨が伝えられました。９月は晩秋蚕の只中の時期、蚕が大きく成長した頃の震災は、養蚕農家に与えたダメージも大きかったことでしょう。西多摩村の蚕種・養蚕業にも、このように震災が影響したことがうかがえます。

100 年近く前の震災の史料も、振り返ってみると、現在の災害対策に多くの教訓を与えてくれる貴重な存在です。



▲史料3：消印は 9 月 17 日で、震災が起きてからしばらくは落ち着いて連絡を取る余裕がなかったことがうかがえる（雨倉寿男家所蔵）

▲写真：現在の丸山。黄色の線が山の稜線、赤色で示しているのが山の地肌が削れて露出している部分。左には羽村市郷土博物館の三角屋根が見える

▲史料２：羽村正春氏による震災前の丸山のスケッチ

部会の手帖

今回の「部会の手帖」では、資料編の刊行に向けて編さん作業を続けている二つの部会の活動を紹介します。

第１部会
～原始・古代・中世～

資料編の原稿執筆及び、入稿した原稿をもとに印刷業者にて試し刷りを作成、校正を加える作業を行いました。

また、接合展開図などの破片データを用いて各土器の整合性を高め、新たなデータの整理を行っています。

第５部会
～民　俗～

三部構成のうち、第一部「くらしと民俗（仮）」の部分について、編集会議を重ねています。

衣食住や年中行事、言い伝えなど、人びとのくらしに関わる部分はそれぞれの家、地区でさまざまです。羽村市域の特徴をおさえつつ個々の例を紹介できるよう、内容の検討を行っています。

News　市史関連講座の開催について

12 月に開催を予定していた第６回羽村市史関連講座につきましては、新型コロナウイルスの感染予防の観点から日程を延期することとしました。改めて令和３年２～３月に開催できるよう準備を進めています。詳しくは、今後の本誌「伸びゆくはむら」や「広報はむら」、羽村市公式サイトなどでお伝えします。

表紙の史料

絵入昔むかし物語

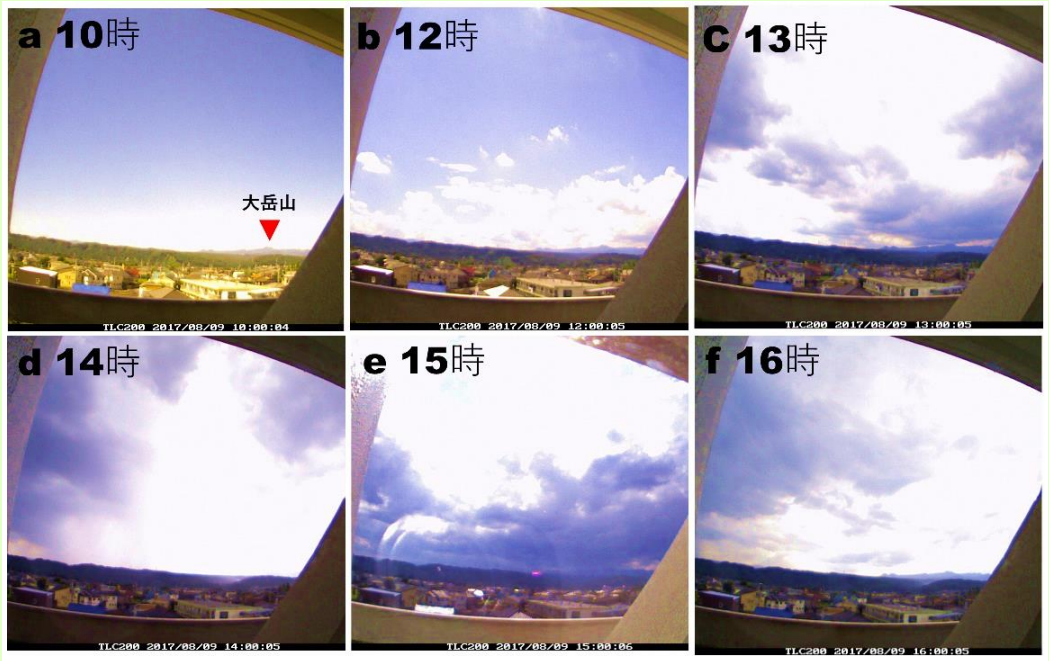
間坂地区に居住していた羽村正春氏（大正３年生まれ）が晩年書き記した、大正～昭和初期の羽村市域の習俗や時事に関する個人記録。他にも「間坂いろいろ」と題した冊子や覚書を多数残しており、当時の羽村市域の生活の様子を色彩豊かに描いています。その中でも表紙の３枚は「三つ目の化け猫」、「青梅線を止めて姿を消した女性」、「あずきばばあ」と「大足」といった怪異譚をピックアップしました。特集で紹介した関東大震災と同じ年代には、こうした怪異が今よりも人々の身近にあったことが分かる興味深い史料です。（史料提供：深野三枝子氏）

資料紹介

今回紹介する資料は、『羽村市史 資料編 自然』から取りあげました。

「 図 10-41 2017 年 8 月 9 日 10～16 時のタイムラプスカメラ画像 」

（資料編 220 ページ）



この写真は、2017 年 8 月 9 日 10～16 時に羽村市役所から西側の山々を撮影したものです。2015 年 12 月から 2018 年 7 月まで、市役所の西側の窓から草花丘陵（向山）と奥多摩の山々にかかる雲の様子を観察するために、タイムラプスカメラ（設定した時間に自動撮影するカメラ）を設置しました。

空模様や生物の行動などから身近な地域の天気を予想する方法を観天望気といいますが、羽村市域で麦の脱穀作業の際に歌われていた「棒打ちうた」には、“大岳山に黒雲がかかれば雨か嵐か”という羽村の観天望気ともいえる一節があります。この「棒打ちうた」をヒントに、夏に大岳山に雲がかかった時の天気の移り変わりを調査したうちの一日が上の写真です。

調査した 2017 年夏は天候不順により、典型的な夏の空模様がなかなか観測できず、夕立の事例も多くありませんでした。その中でも、日中に大岳山に雲がかかったこの日の写真をみてみると、面白いことがわかりました。

（ａ）10 時、晴れて草花丘陵も奥多摩山域の山（大岳山）もよく見えています。11 時になると雲が増えはじめ、（ｂ）12 時には奥多摩の山に雲が広がり始めましたが、市内はまだ晴れています。（ｃ）13 時、空模様が急変し大岳山の上にある黒い雲が羽村の方まで伸びてきました。（ｄ）14 時、奥多摩の山は見えなくなり、草花丘陵の一部も白っぽく“もや”がかかっています。（ｅ）15 時、奥多摩方面には再び黒い雲がかかっていますが、市内には日が差しています。（ｆ）16 時、まだ曇っていますが、奥多摩方面の黒い雲はなくなり、再び大岳山が見えています。

上の写真から降雨の様子はわかりませんが、この日は青梅観測所では降水が観測されなかった一方、羽村取水管理事務所では 1 ㎜の日降水量が記録されていました。さらにレーダー降水強度分布をみたところ、羽村市域では 13 時 40 分から 14 時にかけて 5 ㎜/時未満の降雨があったことがわかりました。

「棒打ちうた」にあるように、13 時に大岳山にかかり始めた黒い雲は羽村での雨の前ぶれであったと考えられます。

“大岳山に黒雲がかかれば雨か嵐か”という「棒打ちうた」の一節は、大岳山の黒い雲が東南東に移動し、羽村周辺に雨を降らせる現象であったということを確認することができました。

市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。（例）① ⇒ 第１部会

月	日	できごと
７月	15 日 （水）	羽村市史編さんだより第 22 号発行
	21 日 （火）	③市外資料調査（東京都公文書館）
８月	４日 （火）	⑤市内資料調査（郷土博物館）
	14 日 （金）	③市外資料調査（東京都公文書館） ⑤編集会議
	18 日 （火）	③市外資料調査（東京都公文書館） ⑤市内資料調査（郷土博物館）
	20 日 （木）	③市外資料調査（東京都公文書館）
	24 日 （月）	③市外資料調査（東京都公文書館） ⑤編集会議
	25 日 （火）	⑤編集会議

月	日	できごと
８月	28 日 （金）	③打合せ会議
	29 日 （土）	③市外資料調査（東京都公文書館）
	31 日 （月）	③市外資料調査（東京都公文書館）
９月	３日 （木）	⑤市内資料調査（郷土博物館）
	７日 （月）	⑤編集会議
	10 日 （木）	⑤編集会議
	16 日 （水）	⑤市内資料調査（郷土博物館）
	17 日 （木）	⑤編集会議
	23 日 （水）	⑤編集会議
	24 日 （木）	⑤市内資料調査（郷土博物館）

「伸びゆくはむら」バックナンバーは以下の場所でご覧いただけます。

●市史編さん室（市役所西庁舎3階）

●羽村市図書館（3階地域資料コーナー）

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトはコチラから

コラム ちっとんべぇ

第 23 回「ディスプレイのその先に」

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、私たちの生活も様々な部分で変革が求められるようになりました。感染防止のためのマスクの着用や手洗い励行のほかに、「３密」の回避や「ソーシャルディスタンス」の確保など、これまでになかった取組みが毎日の暮らしに加わってきています。

その中でも一気に普及が進んだのが、インターネットなどの ICT（情報通信技術）を活用した「テレワーク」や「オンライン授業」ではないでしょうか。

パソコンやスマートフォンを使って、離れていてもお互いの顔を見ながら会話のできる「オンラインミーティング」。市史編さん室でも、先生との面談の際に利用したところ、その利便性にとても感心し、今では部会の活動に欠かせないツールとなっています。

「ウィズコロナ」という考え方が定着しつつある今、こうしたリモートによる会議はさらに増えていくことでしょう。でもやっぱり、パソコンのディスプレイではなく、相手の顔を直接見つめながら議論を交わせる日々に、一日も早く戻ってほしいなと思ってしまいます。

※「ちっとんべぇ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。

令和 2（2020）年 10 月 15 日発行　第 23 号　［発行］羽村市　［編集］羽村市企画総務部市史編さん室
〒205-8601　東京都羽村市緑ヶ丘 5-2-1　電話 042-555-1111 内 364･365　FAX042-578-0131